した。ストレッサーは，Volicerらが開発したHSRSを翻訳し，一部修正した47項目を用いた。ストレス反応は，野村らが開発したストレス評価質問紙法（SCL86）の「体験化」「身体化」の項目を用いた。タイプA行動パターンは，前田のA型傾向判別表を用いて測定した。

結果は，以下であった。1．タイプA群は，タイプB群に比し，ストレッサー及びストレス反応の得点が，有意に高かった。2．診療科（内科系外科系）別の比較では，ストレッサーの得点に差はなかった。ストレス反応の得点は，内科系入院群の得点が外科系入院群に比し，高かった。3．入院期間別では，ストレッサー及びストレス反応の得点において，6カ月以上群の得点が，他群（1カ月未満群，1～3カ月群，3～6カ月群）に比し，高値を示す傾向があった。4．年代群別では，ストレッサーにおいては，明確な有意差はなかった。ストレス反応では，「体験化」において20～40歳群は，40～60歳群及び60～80歳群に比し，有意に得点が高かった。

このように，ストレスには，多くの要因が関与している。ストレス反応をおこしやすい患者の要因を知り，早期に援助することは，患者の健康回復にとって重要であると考える。

## 3．長期間の授乳が産後の月経再来に及ぼす影響 —血中PRL値に焦点をあてて—

中野七福子，我部山キヨ子
（京都大学医療技術短期大学部専攻科助産学特別専攻）

母乳育児への関心が高まり，比較的長期間授乳をする人が増えてきている。一方，この長期間の授乳が，女性の産後の性周期や妊孕性の回復に悪影響を及ぼすとの指摘もあるが，その関連性を調べた報告はほとんど見あたらない。そこで今回，大阪府下K病院の母乳相談室で1991年4月～7月に断乳の指導を受けた42名を対象に，長期間の授乳が産後の女性の身体的復古へ及ぼす影響のうち，特に月経再来と血中プロラクチン（PRL）値の関係を調査した。

調査内容は，1）対象の背景，2）授乳に関する因子，3）分娩から月経再来までの期間，4）断乳1週間前と断乳1カ月後の血中PRL値（以後それぞれ断乳前・断乳後PRL値とする），である。

平均授乳期間は417.4±56.4日であった。平均月経再来時期は10.8±4.6カ月で，全調査対象において，断乳3カ月以内で月経再来を認めた。また，授乳期間の長短による月経再来時期に差は認めなかったが，授乳回数が7回以上の群はそれ未満の群と比べると，月経再来時期は有意に遅くなった。

平均PRL値は，断乳前19.3±8.6ng/ml，断乳後5.7±4.9ng/mlで，断乳後に有意に下降し，いづれも授乳婦人及び成人女性の基準値以内であった。断乳前PRL値も，授乳回数の多い方が有意に高値を示した。断乳後は授乳期間・授乳回数で差を認めなかった。

月経再来時期とPRL値の関係は，再来が遅くなるに従って断乳前PRLは高値を示し，月経再来時期が7カ月未満と15カ月以上では，有意な差を認めた。断乳後PRLはほぼ同値で差を認めなかった。

以上より，授乳期間の長短よりも，授乳回数すなわち乳頭刺激が頻回である程，PRL分泌が亢進し反応性も持続し，これが性腺刺激ホルモンの抑制に働き，月経再来を遅延させたと推測される。しかし，全対象において断乳後3カ月以内に月経が再来しており，長期間の授乳や頻回の授乳は，性機能回復の阻害因子とは言えないと考えられた。

## 4．高齢者の移動動作自立に関する要因について

池添　冬芽，浅川　康吉，羽崎　完，神先 秀人*，入江 清五*，河野　一郎*
（京都大学医療技術短期大学部理学療法学科，京都大学医学部附属病院理学療法部*）